

対話・日本人論

林房雄 ■ 三島由紀夫

対話・日本人論

林房雄 ■ 三島由紀夫

対話 ■ 日本人論

林房雄 ■ 三島由紀夫

印刷 ■ 昭和41年10月20日 発行 ■ 昭和41年10月25日 発行者 ■ 遠藤左介

発行所 ■ 番町書房 ■ 東京都中央区京橋3-5 印刷所 ■ 堀内印刷

製本所 ■ 板倉製本所 価 ■ 380円 検印廃止 ©1966 ■ Printed in Japan

乱丁本、落丁本は本社またはお買求めの書店でお取替えいたします。

林房雄 ■ 明治36年大分県生まれ。東大法学部政治学科中退。主要作品：「青年」「西郷隆盛」「妻の青春」「息子の青春」「大東亜戦争肯定論」

三島由紀夫 ■ 大正14年東京生まれ。東大法学部法律学科卒業。主要作品：「仮面の告白」「潮騒」「金閣寺」「美徳のよろめき」「英霊の声」

対話 ■ 日本人論
目次

目次

第一話

芸術と政治
七

第二話

縦の社会と横の社会
三

第三話

戦後日本の知識人
空

第四話

日本文壇と文学 七

第五話

日本人と日本 三

第六話

天皇と神 二

第七話

精神と生命 一

装幀 ■ 上口睦人

対話 ■ 日本人論

第一話 芸術と政治

苛立ち

三島 林さん、僕も、だんだんこの十年くらいで、イライラすることが多くなって、これは年取ったのではないかと思うのですが、なんだか知らないが、腹が立つてる。腹が立つと、人に会えば嫌なことを言うに決まっているから、なるたけ人に会わないようにする。なにが気に入らないのかよくわかりませんが、そういう心境になることが多い。どうしてかと思うのだけれども、それでは、若いころ愉快だったかというところ、そう愉快でもなかったですね。

林 それは作家の根本性格で、宿命と言っているいいものじゃないかな。胸の中に文学魂が目をさましているかぎりには、作家はいつも何物かに対して怒り、苛立っている。君の最近作『英霊の声』を読みました。これはたいへんな怒りだ。今の世の中に対して怒っている。戦後天皇制をもふくめて、敗戦後のどうしようもない精神状況に対して怒っている。

三島 ただ、なんだか腹が立ってしょうがない。

林 繁栄という名の空洞化に対する激怒だと思いました。どうしようもない日本の現状……繁栄に満足している人もありますが、君は怒っている。しかも、それはただの政治的な怒りじゃない。文学者の怒りだ。私は、あなたよりだいぶ年上ですが、やっぱり筆をとると、とたんに激しくなる。激語を発する。毎日の生活や人との付き合いのほうはだんだんおとな

しくなっていくのですがね（笑）。

三島 同じことかもしれませんね。付き合いは面倒くさいから、やむを得ずすれば、ニコニコしているよりしょうがないような気がするが。林さんにとってこれに似た時代は、前にはどういう時代がありましたか。わけのわからない、イライラするという時代が前にありましたか。

林 それは、私の左翼時代ですね。いや、右翼時代もそうだった。政治的怒りのように見えたが、根本は文学的なものだったのですね。自分は政治とは無縁な男だと悟りのようなものを開いてから、いくらか落ち着き始めたような気がしたが、やっぱり筆をとると激しくなる。年はあてになりませんね。……ところで、僕もあなたも東大の法学部を出ているが、学校では政治というのはどういうふうに習いましたか。

政治というもの

三島 僕は学校時代は、政治というものに対してはまったく無関心だったな。それは、戦争のもっとも激しい昭和十九年に大学に入って、二十、二十一、二十二年に出たのです。ほんとうは政治に関心をいちばんもつべきときかもしれないが、同時にぜんぜん無関心で暮らすことができるという点では、こんなに理想的な時代はなかったわけです。しかし、一面、

法学部というのは、いったいなにをやったのかわからないけれども、あそこを出ると、人間の考えが少し変わっちゃうのですね。歪められているのかも知れません。林さんにも、きつと奥底にあると思いますが、東大法学部の、なんか天下国家に対して、おれはこうしてやるのだ、ああしてやるのだという、妙なエリート意識が、ネガティブな形でも、なんか残るのですね。あれが近代の官僚の悪いところを作った原因でもあるが、それが、文学者が政治を論ずるのと違って、ちょっとわれわれは専門家とまではいかないけれども、どうも別の観点から見ちゃう。文科出の人たちと話していると、いまだにそういうギャップを感じることはありません。どこからくるのでしょうか。まして士官学校を出た人などはずいぶん違うと思います。医学部、工学部を出た人は、また違うかもしれない。教育というものは恐ろしいものですね。勉強してもしなくても同じなんです、それは。

林　私は、政治と文学の区別がわからなかったのですよ。もともと文学青年なんでね。感じ方も、見方も、自己表現の仕方も、文学的な人種だった。政治そのものをも、文学的に解釈していたのですね。政治と文学の区別がわかったのは近ごろになってからのことです。政治というのは、結局、人間の生活問題しか扱えないのだ。けっして思想とか、信仰とか、芸術とか、精神的なものに干渉することはできないということですね。これはジョン・ロックとか、そういうイギリス自由主義流の解釈ですね。アメリカン・デモクラシーにもその面が

ある。思想、芸術、信仰には政治は干渉しえないものだ、してはいけないものだという考え方……。

三島 一種の政教分離ですね。

林 そう。日本では、福澤諭吉などから始まっている。福澤はロックを読んだのでしょう。ただの翻訳ではなくよく消化してあって、……福澤には『帝室論』『尊王論』というのがありますね、明治十六年と二十二年の出版でしたか、明らかに政教分離ですね。……近ごろ読んだ本の中で、はっきりそれを書いているのは、ヤスパースですね。ドイツの実存主義哲学者。彼の『歴史の起源と目標』という本を読んだのですが、はっきりと政教分離です。政治が扱えるものは生活の問題であって、精神生活は扱えない、扱うべきでないと言っている。この立場から、ヤスパースはナチズムにも共産主義にも反対する。ヒトラーの支配下では哲学者は自殺するよりほかないと言ったのは、彼だったでしょう。つまり、ナチズムも共産主義も、いわゆる全体主義で、政治至上で、思想も信仰も芸術も文学も、すべて政治に従わなければならない。そういう左右の全体主義の中で、僕は長いあいだ迷って来たのではないかな。全体主義も一つの政治論で世界観だから、今も通用している。中共の整風運動は全体主義の典型でしょう。政治がすべてを支配できる、すべてを解決できる。人間は人民のため、進歩のため、政治に従属すべきだという政治至上、政治絶対主義。……これに対して、

政治は生活問題以外に干渉してはいかん、させるべきでないというのが自由主義政治論で、僕はこのほうが好みに合うし、正しいと思う。しかし、人間には、政治の優先と政治絶対主義を、本気で信ずる時期があるのではないかな。

三島　ただ僕は、自由主義政治論の欠点は、人間の理性の盲信というのがあると思うのですよ。バートランド・ラッセルが、現在では、いちばん狂気に陥りやすいのは理性だと言っているんですね。つまり、政治がそんなに技術的に扱えるものだろうかという疑問が、僕には非常にある。それは、一つは戦争の体験からかもしれません。政治にはデモニッシュな、人間理性を超えたものがあって、たとえば、ケネディのキューバ封鎖の大バクチだって、理性的計算を尽した上の、人間の超理性的な決断の成功だと思う。近代国家のそもその成り立ちは、「国家」を政治制度に局限しようという動きだったと思うが、やはりそれだけではなく、すまなくなつて、「国家」が個人の内面生活にまで浸透してくる全体主義が、いろいろな形でくりかえされる。すると、国家という観念では間に合わなくなつて、「民族」という、反理性的なパトスに充ちた言葉が必要とされる。ナショナリズムは、近代の理性の産物であるネーションを、やすやすと逸脱してしまうわけです。そんなことから、だんだん考えるようになったのは、なぜプラトンが、理想国家から詩人を追放したのか。それは自分に似ているからではないか。理想国家の政治家にとっては詩人が自分たちに似すぎているからではないか。

自分に似たものは、ほかにはいらない。政治というのは、どうも人間の根元的な衝動に根ざしていると思う。本来、政治と芸術というのは同じ泉から出ているのではないかと僕は思う。だから排斥し合うのではないかと。

林 近ごろ、中央公論社版のおかげで、プラトンの新訳を読んでいます、あれは哲学者、文学者の政治論であって、政治家の政治論ではないね。プラトンは孔子と同じく祭政一致だ。祭政一致というのは、政治の原初的形態であり、根元的なものかもしれない。エジプトもインカも、ユダヤもシナも、ギリシャもローマも、政治の始めは祭政一致だった。日本だけではない。日本には神道の祭政一致があり、ギリシャにもプラトンの賢人政治思想を生んだ神託政治の伝統があった。祭政一致ですね。この祭と政がだんだん分離していくのが政治の近代化の過程で、僕らが大学で習ったのは、政治の関与する範囲を生活問題だけに追いつめた近代政治学だった。ところが、政治自体は昔をわすれない。いくら「近代化」されても祭政一致というウール・キャラクター（原始性格）をもっている、ときどきティラニイ（暴君政治）とか独裁政治とか全体主義などという祭政一致が復活するのではないかな。

芸術の原理

三島 たしかにあると思います。ファシズム論でも前に書いたのですが、どうもファシス

トは、もと芸術家とか、芸術家になりたかった人が多い。ヒトラーも、はじめは絵描きになりたくてしょうがなかった。それから、なんか芸術家になれない人が、ああいうものをやるのですね。そうすると、芸術自体も根本は非常に危険な原理で、もし芸術というものが、こんな一枚の紙でなければ、人を殺すこともできるし、牢屋に放り込むこともできるし、ガス室に放り込むこともできる。ただ、それがさいわいなことに、一枚の紙にすぎないので、なんとかもっている。しかし、それが政治権力になれば、実際に人間を放り込んだり、実際に人間を穴に放り込んで殺すこともできる。ただ、原理はどうも似ているような気がする、政治の原理と芸術の原理は。それだから排斥するというような気がする。やはり全体主義国家の原理は、極度に芸術の原理を政治に導入しているように思えるのですよ、逆に言う。だから芸術が抑圧され、言論が抑圧され、あらゆる自分の目的に反する芸術は、完全にシャットアウトされて、功利主義的な芸術しか許されない。というのは、自分が芸術なんだから、二重の芸術は許さないわけです。

林 おもしろい意見だな。しかし、うっかり賛成しては危険だ。私は政治と名のつくものを信じないことにしている。われわれが習った政教分離の自由主義政治論もやはり一つのフィクションだから……。

三島 それもまたフィクションでしょうがね。それはまた、どうしても十八世紀の古典主